

令和元年6月17日現在

機関番号：24302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16908

研究課題名(和文)「学山」根来寺の形成と展開

研究課題名(英文) Establishment and development of Negoro-dera Temple as "university"

研究代表者

三好 英樹 (Miyoshi, Hideki)

京都府立大学・文学部・研究員

研究者番号：60757574

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：中世後期における紀伊国根来寺は、地域の中核となる巨大な真言寺院であった。従来その発展要因として、周辺地域の人々が寺院経営の実務などを担う行人として入寺し、武力行使や流通・経済活動を活発に行っていたことが重視されてきた。

しかし16世紀半ば、根来寺は「大学」として認識されており、周辺地域のみならず全国各地から多数の学僧たちが修学・修行のために集っていた。本研究では、中世根来寺の僧侶組織や、学僧の存在形態、その時代的な変遷を明らかにすることで、中世根来寺の「学山」(学問寺)としての形成と展開の過程を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中世後期、地域の中核となる地方寺院が出現し、紀伊国根来寺はその代表的な存在として位置づけられている。人びとが多数集う場としての地方寺院は如何にして形成されたのか。従来、その展開要因として、行人方による社会経済活動や武力行使などが注目されてきた。

しかし本研究では、周辺地域のみならず全国各地から根来寺へと惹き寄せられた学僧らの存在形態や時代的な変遷を明らかにすることで、「学山」としての根来寺の形成と展開過程を考察した。中世後期の地方寺院の展開において、寺院の寺院たる所以、つまり寺院の根本的な存立基盤である信仰そして宗教に基づく視角にもよる理解の重要性を考えた。

研究成果の概要(英文)：Negoro-dera Temple located in Kii Province was an enormous temple belongs to Shingon Buddhism with great influence in the local society during the late Middle Age. It has been generally accepted that the people in the neighboring area entered the temple to serve as Gyonin, the clerk monks, were playing a significant role for its prosperity, who were dealing with the management of the temple and positively taking part in the battles, as well as economical activities. Nevertheless, in the mid-16th century, Negoro-dera Temple was widely recognized as "university", which resulted in that many studying monks from, not only the neighboring regions, but also all over Japanese Archipelago, came to Negoro-dera Temple for studying and training. This research aims to investigate the process of establishment and development of Negoro-dera Temple as a "university" in the Middle Age, by revealing how organization of the monks and life of the studying monks had been formed and changed through time.

研究分野：日本史

キーワード：日本史 日本中世史 根来寺 学僧 聖教

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本中世は信仰の時代であり、国家・政治・社会などが宗教と密接に関わっていた。中世後期、「地域的な一揆寺院」(小山靖憲「中世根来寺の組織と経営」『中世寺社と荘園制』塙書房、1998、初出は1991)とも評価される、中世前期の顕密権門寺院とは異なった地方寺院があらわれてくる。そこでは寺院で学ぶ学僧のみならず、周辺地域から事務方として入寺した行人や、門前に集住する職人や商人など、多様な人々によって寺院と門前が形作られ、更に、寺院を中心とした広範な地域社会が形成されていた。

従来、中世後期において、紀伊国根来寺や越前国平泉寺などのような地方の大寺院と、その寺院を中心とする地域社会が形成される背景として、行人方による活発な活動が指摘されてきた。先学の研究成果によると、例えば根来寺では、行人方による社会経済活動や武力行使がその展開上において大きな要因であったことが明らかである。たしかに、彼らの流通・経済活動によって新たな地域社会が生まれ、その權益を護りうる武力を有する根来寺に、周辺地域の土豪・百姓層が入寺することも多々あったであろう。しかしこのような視点のみでは、根来寺が強大な武力を有するがゆえに周辺地域の人々から、なかでも、その活動を担う土豪・百姓層から求められたということになってしまう。また、社会経済活動や武力行使が行人方によって活発に行われるのは、早くとも15世紀後半からのことであり、それ以前の時期に人びとが入寺した根本的な理由や、根来寺の展開過程については未だ詳かになっていない。

16世紀において、人びとが集う場としての地方の大寺院は如何にして形成されたのか。この要因や過程を明らかにするためには、社会経済活動や武力行使に加え、寺院の寺院たる所以、つまり寺院の根本的な存立基盤である信仰そして宗教に基づく視角も重要であると考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究は、中世後期における地方寺院の展開を考えるため、紀伊国根来寺(和歌山県岩出市)を分析対象とし、「学山」(学問寺)としての側面から、その形成と展開の過程を明らかにすることを目的とした。

紀伊国根来寺は、平安時代後期に僧覚鑿によって高野山上に創建された伝法院(のち大伝法院)とともに展開する真言寺院である。鎌倉末から南北朝期にかけて、大伝法院方は、金剛峯寺方との対立から高野山上を離れ、末寺の存した根来の地へと活動の拠点を移動、その後、根来の地にて仏(本尊・伽藍)・法(仏事法会)・僧(僧侶組織)といった三宝と経済基盤を順次整備したことで、根来寺大伝法院を中心とする根来寺を成立させた。

この根来寺(を中心とする根来の地)は、主要堂舎の造営が始まる14世紀半ばまで人びとが多数集うような場所ではなかったが、しかし、16世紀半ばには、例えば西洋で発行された「メルカトル世界図」中の日本列島に「Miaco」(都)と並んで「Negra」(根来)と記されるほど、また、その内容を鵜呑みには出来ないもののキリスト教宣教師ルイス・フロイスの『日本史』に坊院数二千から三千、僧侶数八千から一万人と記述されるほど、西洋にまで知られた、日本列島を代表する大寺院をかたち作るようになる。そして考古学の成果によれば、この時期、四五〇を超える坊院や堂舎が建ち並んでいたと推測されている。

地方の一寺院が如何にして人びとの集う大寺院へとなり得たのか。これまでの研究によって明らかにされてきた社会経済活動や武力行使という視点も重要ではあるが、加えて、宗教や信仰によって突き動かされた人びとの活動も寺院の展開上に位置づける必要がある。そして、行人も修験道など様々な仏道修行を行ってはいれるものの、寺内における仏事法会や教学研鑽の主たる担い手は、やはり学僧である。そのため本研究では学僧、とくに全国各地から修学・修行のために根来寺へと訪れた学僧たる客僧にも注目し、「学山」の形成という視点から、根来寺の展開過程について考察した。

### 3. 研究の方法

天正13年(1585)の羽柴秀吉による根来寺の焼き討ちにより、中世根来寺に存した膨大な文書や聖教群は焼亡、その実態を直接にうかがえる史料は失われた。そのため中世の根来寺像は、周辺地域に残された限られた史料によって描かれてきた。だが近年、各地の自治体史編纂事業や全国の真言宗諸寺院の史料調査の進展によって、根来寺にかかわる新たな文書や、宗教的史料である聖教が見出され始めている。

本研究では、刊本のみならず、目録のみで活字化されていない史料へも目を向け、加えて現時点で把握ができた全国各地の寺院に分散して所蔵される未紹介の原史料の調査も積極的に実施するなど、基礎的史料の広範な収集を行った上で、根来寺へと集った学僧についての分析を行った。また同時に、従来から知られる史料も位置づけ直すことで、中世根来寺における学僧の修学実態や存在形態、その時代的変遷などを明らかにし、「学山」根来寺の形成と展開について考察をした。

### 4. 研究成果

上述のような問題意識と研究方法により、以下の3点を主要な課題として研究をすすめた。

#### (1) 中世根来寺における学僧の存在形態

これまでの研究では、16世紀の根来寺は、学僧らが多数修学する真言の教相本寺としての姿を有しており、そこでは常住の学僧のみならず、全国各地から修学・修行のために根来寺へ

と訪れた多数の客僧たちが研鑽に励んでいたとされ、15世紀後半が「学山」根来寺や宗団形成の一つの画期と評価されている（坂本正仁「中世後期における根来寺と地方寺院・僧侶 新義真言宗の生成と根来寺」『根来寺文化研究所紀要』第2号、根来寺文化研究所、2005）。しかしこのような大枠や見通しが示されてはいるものの、客僧の具体的な事例は未だ少なく、また客僧の寺内における存在形態や修学の有り様も不明瞭である。

そのため、まず根来寺で修学・修行する客僧を含む学僧たちに注目し、13世紀末から16世紀にかけての、彼らの寺内における修学実態や存在形態を、個別具体的な事例をもって明らかにした。例えば、既に先学による研究蓄積のある河内国金剛寺禅恵や武蔵国高幡不動堂儀海らをはじめとして、本研究にて新たに着目した越前国瀧谷寺睿憲、安房国惣持院頼鏝、同国那古寺宥意、下総国千葉庄貞鏝など諸国から根来寺を訪れた学僧たちを取り上げることで、滞在期間や止宿場所といった修学・修行の在り方を時期ごとに明らかにした。

## （2）中世根来寺の僧侶組織

次に、未だ詳かになっていない根来寺学僧の寺内における位置を明らかにすることによって、16世紀における根来寺の行人や学僧を含めた一山全体の僧侶組織を考察した。

16世紀の根来寺は、寺院運営や周辺地域社会への影響力などにおいて、その主導権は行人方によって握られていたとの評価が通説となっている。たしかに根来寺の周辺地域に残存する史料からは、根来寺行人方による経済活動や武力行使は散見されるものの、学僧の活動はほとんど見ることができず、寺院運営や周辺地域社会における学僧の存在感は薄い。しかし当時、行人方ほど周辺地域社会への直接的な働きかけが無かったとしても、寺院における仏事法会や教学研鑽の主たる担い手は学僧である。学僧も組み込んだ僧侶組織の全体像や寺院運営のあり方を明らかにせねば、偏った像となろう。

そのため16世紀における根来寺学僧の組織、とくに客僧の寺内における位置を検討して明確にするとともに、僧侶の集会の過程から、客僧を含む学僧が寺院運営上においても非常に重要な位置を占めていたと評価した。

## （3）「学山」根来寺の形成と展開

（1）（2）の成果と、従来の社会経済活動や武力行使などの視点による根来寺史研究の成果を踏まえ、大伝法院方が根来の地を活動拠点とした13世紀末から、羽柴秀吉による根来攻めによって伽藍が焼失し僧侶らが四散する16世紀末までにおける、客僧を含む学僧たちの存在形態や修学実態、その時代的な変遷を明らかにすることで、本研究の目標とする学問寺院としての根来寺の姿、「学山」根来寺の形成と展開の過程について、段階的な把握をするとともに、その画期を考察した。

まず、13世紀末から14世紀末までは、根来の地へ訪れる客僧は少しずつ増加するものの、客僧たちが結集するような場は無く、それぞれの客僧がそれぞれの子院で修学を行っており、また遠方より訪れた客僧の修学期間は一、二年と短期間であった。14世紀半ば以降、根来寺の中心的伽藍が成立しはじめ伽藍域も拡大していく中、客僧も次第に増加したと考えられるが、このような修学状況は15世紀半ばまでは同様であった。

しかし14世紀半ばからの伽藍造営や僧侶組織および仏事法会の整備拡充など根来寺の成立期を経て寺院の基盤が整ったことにより、論義会や教学研究が展開、その中で14世紀末から15世紀初頭にかけて相次いで根来版が開版された。この開版は、修学に訪れる僧侶の数が増加したことによる真言宗の教本の開版と捉えることができ、15世紀初頭までには客僧を含む学僧らが根来寺へと多数集っていたといえる。このように修学環境が充実したことによって更に客僧も増加し、その結果、15世紀半ばには全国各地から根来寺へと訪れた客僧たちの結集の場として客坊往生院が成立、また客坊の成立からそう降らないであろう時期に、客僧たちの修学上の指導者が根来寺一山の修学上の師となり、能化とよばれる職が誕生したと考えた。

そして客坊が成立した15世紀半ばより以降、根来寺へ訪れる客僧は急増し、彼ら客僧は16世紀には修学上、そして寺院の運営上、大きな影響力を持つ存在へと成長していく。僧侶の急激な増加は、15世紀半ば以降における寺内の坊院数の増加傾向からうかがえ、また客僧の修学期間も、この頃から長期間滞在するようになる様子を確認できる。修学を希求する僧侶を多数受け入れたことが、この時期の根来寺の展開要因であったと評価した。

以上より、客僧たちの存在は教学上も寺院運営上も非常に大きく、根来寺の展開において重要な役割を果たしたと考える。そして、周辺地域から入寺した行人のみならず、常住の学僧に加えて全国各地から事相の修得や特に教相の修学を求める客僧たちを惹きつけ、寺内に多数擁していたという点から、根来寺を学問寺院、「学山」とみなしたい。

客坊往生院が成立した15世紀半ばが「学山」形成上の画期といえ、客坊往生院と15世紀後半に誕生した能化職が修学の要として存在する体制が以降維持され展開することで、根来寺は16世紀半ば、日本列島を代表する「大学」と認識される存在になると考える。

本研究は根来寺それ自体の展開を中心に検討を行ったため、根来寺の展開と地域社会の形成との連関については考察が及ばなかった。今後の課題としたい。

なお本研究の成果は、今後も引き続き論文などとして公表するため、現在準備を進めている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

三好英樹「根来寺と地域社会」(『智山ジャーナル 特集 中世根来寺の宗教活動』第80号、2017、pp. 24-32) 査読無

三好英樹「智積院蔵 論義法度」(『智山ジャーナル 特集 中世根来寺の宗教活動』第80号、2017、pp. 1-2) 査読無

三好英樹「智積院蔵 水天像」(『智山ジャーナル』第79号、2016、pp. 1-2) 査読無

三好英樹「智積院蔵 澄禅筆両界種字曼荼羅」(『智山ジャーナル』第78号、2016、pp. 1-2) 査読無

三好英樹「智積院蔵 雨寶童子像」(『智山ジャーナル』第77号、2016、pp. 1-2) 査読無

〔学会発表〕(計6件)

三好英樹「『学山』根来寺の形成と展開」、第69回佛教史学会学術大会、2018

三好英樹「十六世紀における根来寺の僧侶組織」、蓮花寺佛教研究所10月研究会、2018

三好英樹「信州上田獨股山前山寺所蔵『水天供』と中世根来寺の祈雨」、第62回智山教学大会、2018

三好英樹「中世根来寺における大塔の造営とその意義」、第5回関西建築史研究会、2018

三好英樹「玄宥僧正と智積院 紀伊国根来寺智積院から洛陽東山豊国智積院へ」、根来会、2017

三好英樹「近世における智積院と地方寺僧の修学 房州釜沼山普門院長勝寺所蔵史料の概要と特色」、第60回智山教学大会、2016

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。